

+ 6 3 【けがれ】

「かいじいよ、わしはついとらん」

「なぜでしょうか、金ちゃん」

「かいじいよ、くさいやつをつぎは、きたないやつにであったぞ」

「それは乞食でしょうか、それとも【ひきずりおんな】でしょうか」

「【ひきずりおんな】ならしつとる。あんなに、きたないこじきは、おらんのう。それに、ひとりじゃない」

「なるほど。数人いたんですね。やはり【へたれ】のでた〈桜の花道〉でしょうか」

「いんや。〈ぶたがわら〉じゃ」

「〈豚河原〉ですか。それなら【けがれ】ですね」

「【けがれ】たあ、けがれたお婆けかのう」

「たしかに、からだは穢（けが）れていますが、こころは穢れていません。獣の屍骸（しがい）を片付けたり、皮を剥（は）ぐ河原者（かわらもの）などが、穢多（えた）と呼ばれた時代がありました。ずいぶん差別（さべつ）されたものですが、仕事をよくやる真面目なひとたちばかりです」

「その、えたとやらが【けがれ】になったんか」

「お金持ちのお坊っちゃんなんかに虐（いじ）められて、死んでしまった穢多がおおぜいいます。そういうひとたちが【けがれ】として出沒するのです」

「びんぼうにんのわしが、どうして【けがれ】にであったのかのう」

「【けがれ】は、けがれた人間のこころを浄化（じょうか）してくれるお婆けです」

「じょうかたあ、なんじゃ。わしのこころはけがれとるのか」

「浄化とは清くしてくれること。いくら【けがれ】でも清くできないほどけがれている人間は、【けがれ】に殺されてしまいます。金ちゃんのこころはけがれてはいませんが、いずれけがれることを心配して、老婆心（ろうばしん）で【けがれ】はやってきたのでしょうか」

「わしは、いずれけがれるんか」

「人間はお金持ちになると、だれでもけがれます。金ちゃんはいずれお

金持ちになるので」

「だば、おかねもちにならんよう、きをつけるで、もんだいなしじゃ」

「それなら問題なしですね。【けがれ】の心配は杞憂（きゆう）ということですよ」

おとなになってもぼくは、（他のおばけと同様に）【けがれ】のことを忘れませんでした。

それで、お金持ちにならないよう、気を付けてきました。

それで、【けがれ】に会うことはありませんでした。

このごろはたまに（もしかすると時々）【けがれ】に叱られてもいいから殺されてもいいから、お金持ちになりたいとおもうこともありますが、それまでお金持ちにならないよう気を付けてきたものですから、いまさらどうやってもお金持ちになれそうもありませんでした。